

1 2 3

供覽

右
下



軍務局



技術本部



艦政局

別表

臺灣ニ於ケルキーソク樹ノ栽培ニ就テ

(大正五年九月調)

第一課長
第二課長



局員



軍務局
五十六
五

2094



第一章

ナールノ樹栽培ノ獎勵及現況（大正四年二月調）

第二章

大正四年度ニ於ケル官民行ナールノ造林狀況（大正五年九月調）

第三章

結論 附「ナールノ樹種子配付箇所一覽表」

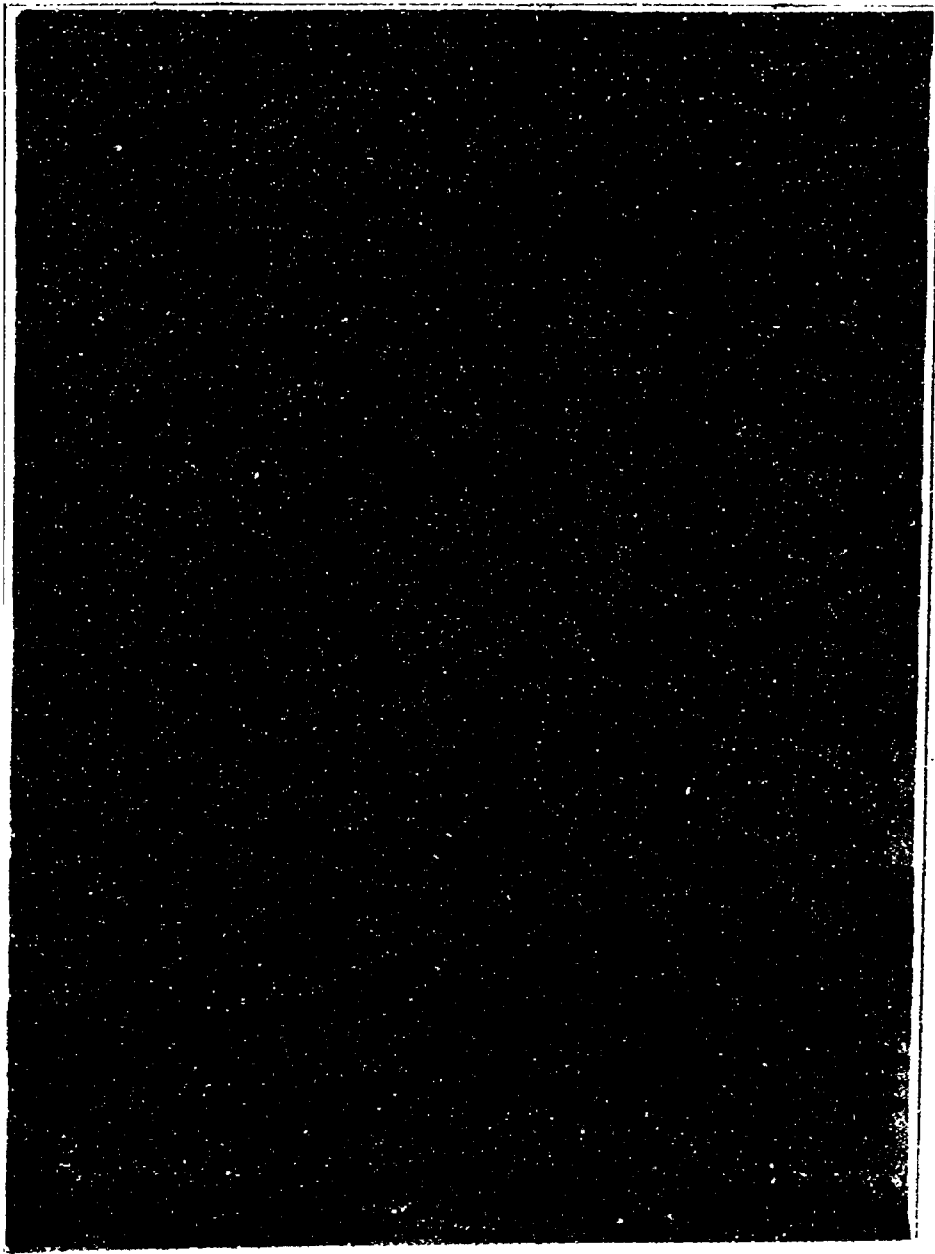
千一ノ樹

樹齡 十年

樹高 三十七尺

胸高周圍 三尺六分

根元周圍 四尺一寸



大正四年一月三十一日撮影、所在阿蘇縣下藩著藜街旧兵營前

2097

2096

「千」樹

樹齡

十年

樹高

三十七尺

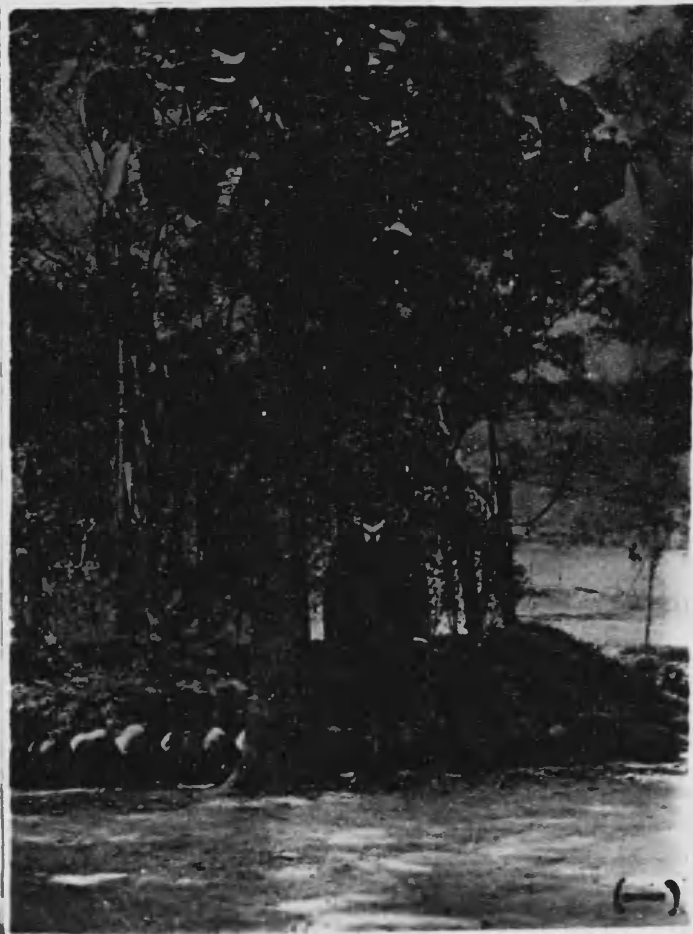
胸高周囲

三尺六分

根元周囲

四尺一寸

大正四年一月三十一日撮影
所在阿緞廢下藩茗藜街旧兵營前



2097

2096

第一章

チーソク樹栽培獎勵及現況

(大正四年三月臺灣總督府殖産局林務課調)

沿革及現況

本島ハ從來林業試験、結果熱帶其他有用植物栽培ニ適
スルコト確認セラレ最近之レガ企劃ヲ爲ス者續出スルニ至
レリト虽氏種苗購入及栽培施業等不便並ニ不明、點數
カラズシテ之レガ實行ニハ官民、協力一致ヲ要スルガ故督
府ニ於テモ熱帶經濟有用植物、調査及獎勵ニ努ムル
コト、ナレリ

就中チーソク、如キハ疾ク明治三十五年暹羅ヨリ今種子ヲ
取寄セ臺北苗圃、恒春熱帶植物殖育場及各地方廢
ニ配付シ播植試験、上銳意之レカ發育ニ留意セル結果

其ノ成績良好ニシテ充分本島ニ成育シ得ヘク將來最モ
有望ナル造林樹種タルヘキヲ認識セラル、ニ至レリ又同年
臺南農事試験場ヨリ臺南市街其ノ他南部各廳
下ニ移植セルチノ苗木ハ其ノ後非常ノ好成績ヲ以テ
成育シ數年前ヨリ谷木多少ツ、結實スルニ至リ阿緱
廳下ニ蕃著藤街兵營附近ニ植栽セラレシモノ、中一本ハ
胸高幹圍三尺二寸根廻リ四尺二寸他、一本ハ胸高幹圍三
尺一寸根廻リ三尺七寸ニシテ此他胸高幹圍三尺内外モノ全
街ニ尚ホ數本アリ

如斯本島ニ於ケルチノ樹ノ成育良好ニシテ其ノ栽培
經營ノ智ニ依リテハ將來最モ有利ナル新産業タル可
キヲ看取シ又一面ニハ最近本邦ニ於ケルチノ、艦艇材其
ノ他ノ用途激増セルニ不拘原產地暹羅ニ於ケル産額僅少

2099

トナレル結果、全樹ノ伐採及搬出頗ル困難トナリ、其價格比年騰貴スルニ至リ、一朝有事ノ際之レニ備フルト共ニ輸入ヲ防遏シ、本島産原料ヲ母國ニ供給スルハ正ニ國産奨励ノ趣旨ニ合致スルモノナルヲ以テ、益々之レガ栽培奨励ノ必要ヲ認メ、督府ニ於テ大正元年度ヨリ地方稅支辨ニ係ル有用植物栽培奨励費ヲ設ケ、各種有用植物ト共ニケータノ栽培ヲモ銳意調査奨励スルニトラレリ

而シテ第一着手トシテ民間企業者ノ最モ困難トスル全種子ノ購入ヲ企圖シ、大正元年度ニ於テハ拾參石五斗五升、大正二年度ハ拾斗石五斗、大正三年(十二月末日迄)ハ拾九石九斗ヲ三井物産株式會社臺北支店ヲ通シテ暹羅ヨリ購入セリ。此等ノ種子ハ各地方獲ハ勿論、民間ニ於ケル栽培者ノ能力及全栽培地ノ狀況等ヲ考查シ、ケータノ栽培ニ適應スル農林業

者ニ實行ト報告ト、責任ヲ條件トシ無償配付ヲナシツ、
アリ而シテ之レカ移植ニ就テモ學校、公園、並木等最モ人
目、觸レ易キ所ニ植栽シ廣クナクシ樹ノ形態、性状、用途
等ヲ知悉セシノ一般ニ合樹、植林思想ヲ普及スルノ必要ヲ認
メ幾分此方針ニ據リ植栽セルモノナキニアラザレド該種子購入
ニ高價ノ費用ヲ投シ態々海外ヨリ取寄スルモノナルヲ以
テ其數量及經費ニ限リアルコト、テ可成散漫ナル配付ヲ
避ケ最モ堅實ナル企業家、模範林、組合林等ニ於テ混
淆林中集團的造林地ヲ形成セシムルニ努メツ、アリ
當府ニテハ主トシテ其被配付箇所ノ狀況及成績並ニ栽培
能力等ニ準シテ種子ノ配付ヲ為シ其播植方法發芽後
ノ成育及苗株ノ處理等ニ関シテハ詳細ナル調査ヲ為シ實
地ニ就キ必要ナル指導ヲ為シツ、アリ即チ最初ハ一般ニ播種

法不明ナルミナラズ種子ニモ不良ノモアリシヲ以テ該發芽率
モ一割以下ニシテ充分ナル成績ヲ擧グルコト能ハザリシ憾アリシ
モ漸次實驗ヲ經ルニ隨ヒ良好ナル種子購入ト共ニ其播植
法モ熟練シ來リ浸水法ヨリモ砂熱法ニ據レルモノ一般ニ發
芽成績良好ニシテ一割乃至二割餘ノ發芽率ヲ示シ一般
ニ好成績ヲ望ムルニ至レリ

從來ヨリシ種子配付試植ノ結果各地方廳中阿緞南投
ノ兩廳下最モ全栽培ニ適シ其成育亦他廳ニ比シ頗ル
良好ナルヲ以テ兩廳當事者モ其有望ナルヲ認メ銳意該
栽培獎勵ニ熱中シ阿緞廳ノ如キハ昨年(大正三年)三月廳
直營ノ下ニ全廳下大垣園庄及ヲタナレウ社(蕃地)ノ兩地ヲ
撰定シ六甲歩ノ面積ニ六千本ノ千トシ苗ヲ本植栽セルガ
殆ンド全部浴着シ成績頗ル佳良ナリ南投廳亦九甲餘

ニ約走万本ノ移植ヲナシ模範林ノ主木トシテ造林スルト共
ニ他面民間ニモ之レカ造林奨励ニ努メツ、アリ本府殖産局
附属林業試験場嘉義支場ニ於テモ銳意ヲケ、シ、播植試
験ニ從事シツ、アリ故ニ其、播種及移植ニ関シテハ相當経験
ヲ重ヌルニ至リ大正三年四月ヨリ大正三年五月ニ涉リ法水溪移
植試験地ニ六千六百二十三本又全支場構内ニ六千三百三十二本山
仔頂試験植地ニ八千九百六十六本ヲ移植セリ爾後除草手入ヲナ
シ夫、成長ヲ助長セル結果移植後ノ成績極メテ良好ニ
シテ大ナルモノハ樹高尠大餘胸高幹圍五寸餘ニ達シ小ナル
モノモ樹高五六尺胸高幹圍三寸内外ニシテ成育旺盛ナリ
而シテ曰下全支場苗圃ニ於ケル全苗株數ハ尠万六千餘本
ニシテ移植ニ適當ナル苗長ニ達セル片試験造林用トシテ
全部法水溪移植試験地ニ本植栽、見込ニナリ

2103

民間谷造林地ニ於テモ其ノ強風ノ當ラサル地域ニハ「チーク」ノ造林
ヲ企劃シ漸次「チーク」造林專業者ノ實現ヲ見ントスル傾向
アルハ本島ニ於ケル全栽培上慶賀ニ堪ヘザル所ナリ即チ大寶
造林所(臺中)拓南社(臺南)觀音内里溪埔庄(臺南)拓殖
株式會社老埤農場(阿緱)廳五溝水庄及藤倉造林所阿
緱廳月眉新庄其他二三ヶ所ニ於テハ夫々從來當府ヨリ配
付セル種子ヲ基礎トシテ本植栽ヲナシ現ニ大寶造林所ハ
約三千本ヲ移植シ拓南社ハ二千五百本藤倉造林所ハ老万
本ヲ移植シ此他南隆農場及老埤農場等ニ於テモ多
少移植シツ、アリ殊ニ老埤農場ニ於テハ本島ニ於ケル最初ノ
「チーク」直播造林ヲ實行セルカ今日迄ノ經過ニ徴スルニ成績
案外良好ニシテ更ニ茶芽後ノ成育状態ニ関シ留意スルノ
必要アルヲ以テ本府ニ於テモ右試驗ノ結果ニ就キ特ニ囑

4

2104

曰ニツ、アリ前記、如ク目下民間ニ於テハ、藤倉造林所最ニ
多数ノ「ナール」樹ヲ移植ニツ、アリテ其ノ地域亦同栽培ニ適
シ今後モ主トシテ同樹栽培ノ方針ニシテ此他ノ造林所モ現ニ
尅万餘本ノ苗株ヲ有シ其山出苗ニ適スル苗長ニ達スルヲ待
チ夫々移植スヘキ計畫ナリ如斯大正元年度ヨリ多量ノ「ナ
ール」種子ヲ購入シテ銳意該栽培奨励ニ努メタル結果
其ノ將來有利ナル造林タルヘキヲ看取シ前記、如ク民間
ニ於テモ漸ク具體的ニ該栽培ヲ企劃スルニ至レリト云凡其
ノ植栽數及面積ハ實ニ微々タルモノニシテ多キハ尅万本以
キハ二千本内外ニシテ僅カニ本島ニ於ケル「ナール」造林初期
ノ一階梯ニ入レルニ過トザルモ目下今栽培發展ノ氣運ニ向
ヒツ、アル折柄之ヲ基礎トシテ向後益々今栽培ニ努ムルニ於
テハ相當ノ「ナール」造林ヲ形成シ得ルニ至ルヘシ

將來ノ方針

今ヤ國產獎勵ノ我邦朝野ノ方針トナリタル時ニ當リ一層勉メテ本島ニ於ケルブナノ樹ノ栽培及増殖ニ盡カセサルヘカラサルナリ之ニ依リ今後モ從來ノ方針ヲ進メテ實地ニ遂行ヲ期スルハ勿論目下栽培中ノ民業者ヲ相當保護獎勵シ島内ニ於テ充分ノ種子生産シ得ラル、迄可成多量ノ種子ヲ購入配付シテ益々之ヲ栽培獎勵ヲ為スト共ニ右適地ヲ調査シ經濟的造林地ヲ形成セシムルニ努メントス

本島ニ於ケルブナノ樹目下ノ成育狀態ヨリ推シ十五ヶ年乃至二十ヶ年ニシテ目通り直径七寸以上直径餘ニ達シ相當間伐ヲナシ得ヘキ見込ミナルモ二十ヶ年内外之ガ造林ニ多大ノ勞資ヲ固定セシメ其間一ノノ收入ナキニ於テハ或ル特種ノ造林者及大資本家以外到底一般造林業者ノ企及

シ得ザル所ナルヲ以テ造林地域ニ於テ閑墾農業等ニ依
リ一時多少ノ收入ヲ擧ゲツ、造林ヲ實行スル即チ混農
造林法ニ據ルハ木樹造林ノ性質上最モ適當ト認ムル
所ニシテ現ニ拓南社ニ於テハ今造林法ヲ實行シ著々好
成績ヲ擧ゲツ、アル有様ニシテ近時各造林業者モ漸ク
之ニ倣フ者アルニ至レリト云凡今後モ可及的該造林法ニ據
ラシメント期ス勿論本造林ハ伐期迄比較的長年月ヲ
要シ國家自ラ經營スルハ最モ理想的ニシテ其次ハチーソ
所業工業備林スハ汎利ヲ急ガザル富豪ノ經營ヲ適當
トシ漸次其ノ機運ニ趨クベキモ現在ニ於テハ直チニ官營ト
スル能ハザルヲ遺憾トス
要スルニチーソ、國內栽培ハ將來軍事上並ニ工業上必要ニシテ
而シテ當初ハ相當ノ困難ニ遭遇スルコト明カニシテ到底性急

ノ成功ヲ期ス(キニアラズト云ハ相當ノ年月ヲ期シ資本ヲ投
下シ不漸ノ忍耐力行ヲ以テ確實ニ繁殖ヲ期セバ成功
確實ト認ムルヲ以テ此ノ主旨ニ依リ官民ノ一致協力ヲ促
スヲ期セザルベカラズ

第二章

大正四年度ニ於ケル官民行キノ造林状況

(大正五年九月臺灣總督府殖産局林務課調)

(一) 民行造林

曩ニ大正四年二月調提出セル「キ」栽培奨励概況ニ記述セ
如ク其ノ後、栽培奨励ニ従前ト大差ナク益々之レカ増殖ヲ圖
ラントシテ多量ノ種子ヲ暹羅ヨリ購入スク手配セシ採集上、
都合ニヨリ大正四年度内ニ到着セズ本年(大正五年)四月中旬
漸ク到着セル為メ大正四年度ハ遺憾ナカラ種子ノ配付ヲ

トスリ能ハムシテ唯先年(大正三年)配付セシ種子ノ苗株残存セルモノヲ移植セシニ過キザルヲ以テ植栽面積及本数ハ其ノ後比較的增加セサルニ今集團的ニ造林セル島内既成ノ民営ノ造林地ノ面積及本数ヲ概記スレハ左ノ如シ

廳別	面積	本数	摘要
臺中	一、二、四	五六四一	大庄農林部
南投	四、五	七五三六	三英竹林事務所、農科大學演習林、臺灣製糖株式會社、其他
嘉義	四	四〇二八	臺灣製糖株式會社、村井造林所、其他
臺南	八、一、五	五三、五〇	拓南社、赤田造林所、臺南農會等
阿緞	三、二	四〇〇〇	藤倉造林所、南庄農場等
臺東	一	一、一、五	
花蓮	一〇	一〇、〇〇〇	
計	一、七、七	六、一、七	

此他學校公園等ニ植栽セラレアルモノ甚カラス
 今右表中主ナル造林地各年度ノ植栽數及生長量ヲ示セバ
 左ノ如シ

(1) 大寶造林部(臺中街)

本場ハ許可面積四千六百餘甲ヲ有シ其ノ溪間風害ノ虞
 ナキ地ヲ撰ミ植栽セリ氣温亦適當ニシテ其ノ成育良
 好ナルヲ以テ將來有望ナル造林地タリ得ヘシ溪間全
 部ヲ使用シ千甲迄擴張ノ希望ヲ有シ居レリ

植栽年度	面積	本數	生長量		摘要
			樹高根圍	幹圍	
大正二年	〇 ^甲 三七九一	六八七	一九尺	七八	
大正三年	一〇一五五〇	一三四五〇	一五	五〇	三〇
大正四年	二〇三〇〇	一四七四	四	三五	一五
計	三五六四一	一四六一〇			

④ 拓南社（臺南廳溪埔庄）

本社ハ許可面積八百十甲ヲ有シ農林並行ヲ以テ本
 旨トシ風害ナキ良好ナル溪間及適當ナル箇所ハ全部
 「チーク」造林地ニ充當セシトシツニアリ

植栽年度	面積	積本	樹高	根長	樹圍	樹圍	摘要
大正三年	二 ^甲 五〇〇	二五四九	一六尺	四九	五三		
大正四年	一六〇〇〇	一五六〇〇	一五	四〇	五〇		
計	一八五〇〇	一九二四九					

八 藤倉造林所（阿緱廳新庄）

本所造林地ハチーク栽培ニ好適ノ地ニシテ其ノ成育亦
 良好ナリ

植栽年度	面積	積本	樹高	根長	樹圍	樹圍	摘要
大正二年	一 ^甲 五〇〇	一〇〇〇	二五尺	一一〇	六〇		

(一) 官行造林

林業試験場嘉義支場

	大正三年	大正四年	計
面積	一三五〇〇	一〇〇〇〇	二五〇〇〇
木数	九〇〇九	五一三六	一五四四五
樹高	二二〇	九〇	
根圍	九〇	八〇	
幹圍	五〇	三〇	
植栽年度			

	大正二年	同	大正三年	同	大正四年	計
面積	〇、〇〇〇	〇、三三二〇	六、〇〇〇	〇、二九六〇	三、〇〇〇	二、〇一三八〇
木数	五、〇〇	三、三二	一四、六六三	二、九六	二、七三三	一八、四九一
樹高	三、〇	三、〇	一〇、八		三、〇	
根圍	八、八	八、〇	五、〇		二、七	
幹圍	六、二	六、〇	三、一			
植栽年度						
植栽地	法水溪移植地	山仔頂支場構内	法水溪移植地	山仔頂支場構内	法水溪移植地	法水溪移植地

右ノ外專賣局、南投廳、阿緱廳等ニ於テモ造林セルカ未ク

少許ニシテ合計植付本数一八三六本面積約一九甲ニ
過キス

現時ノ趨勢

當村ニ於テ大正元年始メテ多数ノ種子ヲ購入シテ地方
廢ハ勿論各地ノ農林業者ニ其能力・地況及希望ニ應
ジ無償配付ヲ為スト共ニ時々之カ發芽及植栽狀況等ヲ
調査シテ指導獎勵ニ努メタル結果其植栽比較的簡
易ニシテ相當方法ヲ適地ニ植栽スルニ於テハ成長迅速良好
ナルト其ノ發芽・移植等ニ関シ漸次熟練トシテ積ムニ
從ヒ且時益々キリク栽培希望者ヲ生シ前記造林地以外畝
田・農場・嘉義園下等ニ於テモ多数植栽ノ見込ニテ多量
ノ種子配付ヲ希望シツ、アリ

サト木造林ノ性質上伐期追比較的長年月ヲ要スルヲ以テ

急速ニ之カ成功ヲ望ム可カラザル又近時漸ク該栽培、有利
トシテ認メ多数造林ヲ企畫シツ、アル狀況ナルヲ以テ相當時
日経過ト共ニ今後益々發展スルニ至ルヘシ

現ニ臺東廳各小公學校及阿緞農會等ニ於テハ
御大典紀念造林トシテ、ケーク植林ヲ實行スヘク苗株
ノ養成又ハ移植等着々之ヲ企劃ヲナシツ、アル者モアリ
但シケークノ造林ハ遠大ノ計畫ヲ要スル事業ナルヲ以テ官
業計畫ヲ規畫的ニ遂行スルヲ要ス將タ船艦ニ關係スル
海軍又ハ造船業者ノ盡力ヲ希望スヘキモノト思惟ス

本年(大正五年)五月暹羅産ケーク種子五十二石ヲ購入シテ
各地方廳及農林業者等ニ配付セルニ其ノ後ノ奈芽状
態モ一般ニ良好ナルヲ以テ益々ケーク栽培本数及面積
増殖ヲ見ルニ至ルヘシ尚ホ参考トシテ大正元年以前ニ

第三章
結論



植栽年月		箇	所	平均生長量			摘	要
植栽年月	箇	所	樹高	根圍	幹圍	摘	要	
明治三十八年	南段農林机埔 支農構内	五三〇	三三六	二六七	十本現存			
二十三年五月 植内	嘉義赤牛六支農 構内	四八〇	三八五	二八七	二本			
四十年三月	〃	四〇〇	二六六	二二五	十本			
〃	〃	三〇〇	一七四	一二四	三本			
〃	嘉義公園	三〇〇	二二三	一八二	六本			
〃	阿緱農構内	四〇〇	四〇〇	三三〇	一本			
〃	阿緱農構内 公園	四二〇	四三〇	三二〇	八本			
〃	老埤原野	一八〇	三〇〇	一七〇	四本			

植栽年月、箇、所、樹高、根圍、幹圍、摘、要

既往ノ経過並ニ現在ニ於ケル「ナーク」樹栽培ノ狀況ヲ見ルニ幼樹
及十年乃至十五年ノ少壯期ニ於ケル生長ハ頗ル旺盛ニシ
テ其深緑ナル葉大ノ濶葉ト直立セル脩長ノ幹楨トハ共
ニ堂々トシテ衝天ノ概アリ壯觀實ニ人意ヲ快フスルニ足ル
然レ氏二十年三十年以上ニ及ニテモ猶ホ依然此雄勢ヲ持統
ニテ發育生長スキヤ否ヤハ頗ル疑問ニ屬シ造船材料トシ
甲板材等トシテ使用ニ適スルニ少クモ樹齡一百年ヲ要スル
モノト計算ニ置クヲ穩當ナリトスベク、而シテ此ノ如キ長年
月ヲ以テスル植林經濟ハ到底普通林業者ノ堪ヘ得ルト云
ニアラザルヲ以テ、民業トシテハ是非共資金ノ極メテ豊阜ニ
シテ収利ヲ急カザル財團若ハ富家ニ俟ツノ外ナカレバ、
之レト同時ニ植樹ノ生長ニ從テ間伐スベキ若木ノ利用法
ヲ講究スルニ亦ト是レ一個緊要事ニ屬ス

2116

之ヲ要スルニ、臺灣ニ於ケルチーグノ栽培事業ハ最モ好
成績ニシテ其ノ前途ハ亦夕最モ有望ナリ、既往十五年間
ノ實驗ニ徴スルニ、臺灣ハ氣温、乾湿、地味共ニ最モチーグ
ノ栽培ニ適シ、其生長状態ハ極メテ見事ニシテ、將來ニ於
テハ、臺灣林産物ノ主要ナル部分ヲ占メ、貴重ナル造船
材料トシテ、大ニ内外ノ歡迎ヲ受クルニ至ルヘキハ、蓋シ一點ノ疑
ヲ存セザルトヨナリ、但シチーグノ造林事業タルヤ、風害ノ虞
ナキ特種地形ノ廣大ナル地積ト、比較的長年月トヲ要シ、
所謂百年ノ長計ニ屬スルカ故ニ、實利的事業トシテハ頗
フル民業ニ適セザルモノナルヲ以テ、國家自カラ之ヲ經營スルカ又
ハ國家ガ各種ノ保護ヲ加エテ十分ニ事業ノ發展ヲ奨
勵スルノ必要アルモノト認ム

附表

千ノリ樹種子配付先及数量一覽表

配付先	大正元年				大正二年				計
	大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	
林業試験場 臺北赤木場		非	一〇	非	三〇	非		四〇	非
全 嘉義支場	二四四	二一〇	一五〇	五五〇	一一、五四				
全 恒春支場	三〇	三〇		五〇	一一〇				
臺北 鹿寮	一七			五〇	六七				
桃園 鹿寮	一七			五〇	六七				
新竹 鹿寮	一七			五〇	六七				
臺北 中鹿寮	九八	一一〇	一五〇	二〇〇	五六八				
南投 鹿寮	三三	三六〇	三〇〇	二〇〇	八九四				
嘉義 鹿寮	一三八	一三〇	一五〇	二〇〇	六〇八				
臺南 鹿寮	一〇八	一四〇	一五〇	二〇〇	五九八				
阿緞 鹿寮	一〇八	三三〇	三〇〇	五〇〇	一一三八				

南投農會	嘉義農會	臺中農會	新竹農會	桃園農會	農科大學演習林	有用植物插植試驗地	大目降糖業試驗場	三叉河樹苗養成所	南投農埔里社支場	花蓮港農會	臺東農會	宜蘭農會
					四四			一七		四四	四四	
					六〇		二〇		一〇	五〇	六〇	五〇
二〇	二〇	二〇	一〇	一〇		一五〇		一〇		六〇	六〇	
					一〇〇			五〇		一〇〇	二〇〇	五〇
二〇	二〇	二〇	一〇	一〇	二〇四	一五〇	二〇	七七	一〇	二三四	三六四	一〇〇

小松造林事務所	荒井造林事務所	藤倉造林事務所	杉井造林事務所	藤井造林事務所	學務課	豊田村移民指導所	林田村移民指導所	吉野村移民指導所	旭村移民指導所	臺北廳農會	阿緞廳農會	甘藷南廳農會
		三〇	一〇	一七	五〇			三二	三二			
		一三〇	八〇	四〇				一〇	一〇			
一〇	一〇	一七〇	五〇	三〇		四〇	四〇	四〇	四〇	一〇	二〇	二〇
		一〇	五〇	一〇		二〇	二〇	二〇				
一〇	一〇	三四〇	一四〇	九七	五〇	六〇	六〇	九二	七二	一〇	二〇	二〇

全 光輝農場	臺灣拓殖株式會社	臺灣農林株式會社	全 八味造林部	三井物産會社造林部	大寶農林部	今村農場	南隆農場	拓南社	林 季 高	簡 阿 牛	三菱林事務所	小井造林事務所
	五〇	一〇	三四		三〇	一〇	一〇					
	一三〇	八〇			一三〇	一〇	七〇	八〇			三〇	四〇
一七〇		三〇		五〇	一〇〇	五〇	一六〇	一七〇	一〇	一〇	一五〇	一〇
	二〇〇	二〇		五〇	四〇〇	三〇	二〇〇	三〇〇			五五〇	三〇
一七〇	三七〇	一四〇	三四	一〇〇	六六〇	一〇〇	四四〇	五五〇	一〇	一〇	四三〇	八〇

合	花蓮流 樂流會社 鳳林工場	植村千太郎	清田 "	銘造林事務所	嘉義樹苗養成所	合 鉤潭農場	合 埔里社農場	甘藷灣製糖株式會社
計								一〇
一三、五、五、外								
三、五、外						五〇		
〇九、九、外							一〇	
五、一、七、〇	三〇	三〇	五〇	二五〇	七〇〇			
一、一、七、六、五	三〇	三〇	五〇	二五〇	七〇〇	四〇	一〇	一〇

2122

13

雜

著

MISCELLANEOUS. No. 11 (1916).

大臣官房



CORRESPONDENCE

WITH THE

UNITED STATES AMBASSADOR

RESPECTING THE

“TRADING WITH THE ENEMY (EXTENSION OF POWERS) ACT, 1915.”

*Presented to both Houses of Parliament by Command of His Majesty.
April 1916.*

LONDON:

PRINTED UNDER THE AUTHORITY OF HIS MAJESTY'S STATIONERY OFFICE
BY HARRISON AND SONS, 45-47, ST. MARTIN'S LANE, W.C.,
PRINTERS IN ORDINARY TO HIS MAJESTY.

To be purchased, either directly or through any Bookseller, from
WYMAN AND SONS, LIMITED, 29, BREAMS BUILDINGS, FETTER LANE, E.C., and
28, ABINGDON STREET, S.W., and 54, ST. MARY STREET, CARDIFF; or
H.M. STATIONERY OFFICE (SCOTTISH BRANCH), 23, FORTH STREET, EDINBURGH; or
E. PONSONBY, LIMITED, 116, GRAFTON STREET, DUBLIN;
or from the Agencies in the British Colonies and Dependencies,
the United States of America and other Foreign Countries of
T. FISHER UNWIN, LIMITED, LONDON, W.C.

1916.

[Cd. 8225.] Price 1/6d.

宮
内
省
文
書
館

アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

<http://www.jacar.go.jp/>

Correspondence with the United States Ambassador respecting
the "Trading with the Enemy (Extension of Powers)
Act, 1915."

No. 1.

Mr. Page, United States Ambassador in London, to Sir Edward Grey.

American Embassy, London,

January 26, 1916.

Sir,

WITH reference to the Act of Parliament entitled "Trading with the Enemy (Extension of Powers) Act, 1915," given Royal approval on 23rd December last, I have the honour to set forth herewith the views of my Government in this regard.

The Secretary of State has given consideration to the Trading with the Enemy Act of 23rd December last, the apparent object of which is to prevent any person doing business in the United Kingdom from trading with enemies of Great Britain, or persons having enemy associations in any other part of the world, and has reached the conclusion that this Act is pregnant with possibilities of undue interference with American trade; if, in fact, such interference is not now being practised.

As the Secretary of State is inclined to share the opinion generally held in the United States that in the framing of this Act the right of persons domiciled in the United States—whether American citizens or subjects of the countries at war with Great Britain—to carry on trade with persons in belligerent countries has been overlooked, and that the exercise of this right may be subject to denial or abridgment in the course of the enforcement of the above-mentioned Act, the Government of the United States is constrained to express to His Majesty's Government the grave apprehensions which are entertained on this subject, both by it and by traders domiciled in the United States.

It has therefore been thought necessary to bring these views to the attention of His Majesty's Government, and to present a formal reservation of the right of the Government of the United States to protest against the application of this Act in so far as it affects the trade of the United States by imposing restrictions upon its freedom.

I have, &c.

WALTER HINES PAGE.

No. 2.

Sir Edward Grey to Mr. Page.

Your Excellency,

Foreign Office, February 16, 1916.

I HAVE the honour to acknowledge the receipt of your Excellency's note of the 26th ultimo relative to the possible effects of the "Trading with the Enemy (Extension of Powers) Act, 1915," on United States commerce.

The Act was framed with the object of bringing British trading with the enemy regulations into greater harmony with those adopted by the French Government since the commencement of the war, by applying in some degree the test of nationality in the determination of enemy character, in addition to the old test of domicile, which experience has shown cannot provide a sufficient basis under modern commercial conditions for measures intended to deprive the enemy of all assistance, direct or indirect, from national resources.

His Majesty's Government realised, however, that the application of this principle to its fullest extent, while entirely legitimate and in accordance with the practice of

[507]

other countries, might, if applied at the present time to commercial activities as widespread as those of British subjects, involve avoidable inconvenience and loss to innocent traders.

They were careful, therefore, in devising the necessary legislation, not only to avoid any definition which would impose enemy status upon all persons of enemy nationality and associations, but also to take powers of discrimination which would enable them to apply the purely commercial restrictions contemplated only in regard to those persons from whom it was necessary in British interests to withhold the facilities afforded by British resources.

His Majesty's Government have therefore abstained from a course of action admittedly within their rights as belligerents, which is not only the existing practice of the French Government, but in strict accordance with the doctrine openly avowed by many other States to be the basis upon which their trading with the enemy regulations would be founded in the event of war, and have confined themselves to passing a piece of purely domestic legislation empowering them to restrict the activities and trade of persons under British jurisdiction in such a manner and to such an extent as may seem to them to be necessary in the national interest.

His Majesty's Government readily admit the right of persons of any nationality resident in the United States to engage in legitimate commercial transactions with any other persons. They cannot admit, however, that this right can in any way limit the right of other Governments to restrict the commercial activities of their nationals in any manner which may seem desirable to them by the imposition of prohibitions and penalties which are operative solely upon persons under their jurisdiction.

In claiming this right, which appears to them to be inherent in sovereignty and national independence, His Majesty's Government desire to assure the United States Government that they will exercise it with every possible care to avoid injury to neutral commerce, and they venture to think that the voluntary limitation of their powers by the terms of the "Trading with the Enemy (Extension of Powers) Act, 1915," is evidence of their desire and intention to act with the greatest possible consideration for neutral interests.

I have, &c.
E. GREY.

MISCELLANEOUS. No. 11 (1916).

CORRESPONDENCE with the United States Ambassador respecting the "Trading with the Enemy (Extension of Powers) Act, 1915."

*Presented to both Houses of Parliament by Command
of His Majesty. April 1916.*

LONDON :
PRINTED BY HARRISON AND SONS.

2126

砲術多我報

2127

手記

艦政局



軍務局

陸軍部

此所記は...

上申中、兵器、建築物ニシテ
未タ實施ニ至ラサルモノ

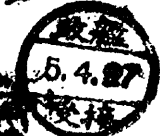
兵器部
数量

副部
理

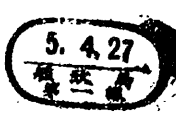
由

品	数量	備考
四十五口径六口径砲	二門	貸典砲二門、不且ニ付
三八口径機銃	一門	目下前中隊訓練ヲ行フ能ハスニ付
三年式機銃	一門	新式兵器ニ付研究用トシテ
全空砲發射器	一個	
武式測距儀	一臺	新式船舶ニ備付ケアルモ本校ニ宜之
全内部摸型	一個	測距手訓練ニ是非共必要ニ付
武式九呎測定儀	一臺	分解用トシテ
火藥庫冷却裝置模型	一組	教授上必要ニ付

四月廿一日
官房



務局接受
四月廿一日



2128

教育本部
四月廿一日

三三和

呼音徑 奈火裝置	八組	補用數少キ多 教育ニ不便ヲ来スノミナラス 常ニ常用兵器ヲ分解スルノ止ムヲ得サル 状態ニアルニ付
呼音徑 奈火裝置	八組	艦船ノ供用兵器ナルカ故ニ本校ニ於テ
呼音徑 電氣寒暖計	一組	學生及練習生教育資料トシテ
呼音徑 通信器	一組	必要ナルモ現品ナキ多 唯單簡ナル
呼音徑 通信器	一組	暑圖ニ依リ口授シテアルニ付
呼音徑 試驗器	三組	
呼音徑 電流計	二個	

建築物ノ部

新築及増築ヲ要スルモノ

名稱

坪數 構造

理由

講堂

天。煙作二階家

現講堂ニ教室數着多不足
講堂トシテ不適當ニ付上
記ノモリヲ

水雷科倉庫

二。半 木造二階家

現在堂砲科ト共用中
著者ニ付

柔道及擊劍場	三三〇。	木造平家	着シテ狹隘ニ付
兵員糧倉倉庫	一六〇。	木造平家	不足ニ付
兵舎下水工事	三七。間煉瓦トシテ	講堂新築ト同時ニ工事着手ノ旨	
學生講堂			
右	大修理ヲ要スルモノ		
礎		三五〇。	木造

巻

職員現在調

四月廿日

校長

少将

山路一善

副官

少佐

福田武男

教官

大尉

青木宗作

教官

中佐

白根能三

同

同

志賀巳之治

同

同

兼坂隆

同

少佐

大湊直太郎

同

同

松本匠

同

同

山口権平

同

同

東林岩次郎

同

同

大野寛

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
中主計	中庫醫	大庫醫	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
平野	林	原田	一	谷山	寺澤	鈴木	喜田	尾上	白木	白木	白木	白木	白木	白木	白木	白木	白木	白木	白木	白木
見橋	良	右	右	國	市	市	市	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜	喜
作	齊	橋	橋	彦	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎	郎

校附少主計九里次作

兵曹長 三名

上等筆 十九名

上等後圖書 一名

筆記長 一名

上等筆記 一名

定員下士 百三十七名

率 三百五名

學生出入豫定表 (大正四年度、殘部) 海軍砲術學校

高等科學生

期別	員數	始業期日	卒業期日
第十五期	未定	大正五年五月二十九日	大正五年十一月二十九日

普通科學生

期別	員數	始業期日	卒業期日
第二十四期	五〇	大正五年一月十日	大正五年五月二十五日
第二十五期	六〇以內	大正五年五月二十九日	大正五年十一月二十九日
第二十六期	六〇以內	大正五年十二月八日	大正六年五月二十五日

商船學生

期別	員數	始業期日	卒業期日
第十八期	七二	大正四年十二月一日	大正五年四月十日
第十九期	七三	大正五年五月一日	大正五年七月下旬
第二十期	三八	大正五年十一月十六日	大正六年三月下旬

練習生出入豫定表 (大正四年度ノ殘部) 海軍砲術學校

普通科練習生

期別	員數	所管鎮守府別			募集	所見表本校到達	入校始業	卒業	記事
		横	吳	佐舞					
第三十期	二三四	六二	八二	六〇	三〇				
第二十一期	二三三	七七	六六	五六	三四				
第二十二期	二六七	八七	六〇	七七	四三				
第二十三期	二六七	八七	六〇	七七	四三				
第二十四期	二六六	八六	六〇	七六	四四				

採用試験ハ募集期日後約一ヶ月ニ行フヲ例トス

高等科練習生

期別	員數	所管鎮守府別			募集	所見表本校到達	入校始業	卒業	記事
		横	吳	佐舞					
第二十七期	七〇	二〇	二〇	一三	一七				
第二十八期	七〇	二〇	二〇	一三	一七				
第二十九期	九〇	二七	二〇	二〇	二三				
第三十期	九〇	二六	二〇	二〇	二四				
第三十一期	九〇	二七	二〇	二〇	二三				

特修科練習生

期別	員數	所管鎮守府別			募集	所見表本校到達	入校始業	卒業	記事
		横	吳	佐舞					
第六期	二〇	六	五	五	四				
第七期	三〇	八	七	八	七				
第八期	三〇	七	八	七	八				

海軍砲術學校 學生練習生演習豫定表 (自大正五年三月)

學生練習生演習豫定表 (自大正五年三月) 海軍砲術學校

艦砲射擊		外艦砲射擊		野外演習	
出發期日	演習日數	學生別	練習生別	參加軍艦	演習地
五、三、三〇	三	第六期特修科	橋筑	立波	山
五、四、五	一〇	第二十七期高等科 第三十期普通科	橋筑	立波	薄山
五、四、二四	三	第六期特修科	周筑	防波	山
五、五、五	一	第六期特修科	周筑	防波	薄山
五、七、一五	一〇	第二十八期高等科 第三十一期普通科	周筑	防波	薄
五、九、二八	三	第七期特修科	周筑	防波	山
五、一〇、二〇	三	第七期特修科	周筑	防波	薄
五、一〇、二八	一〇	第二十五期普通科	周筑	防	薄山
五、一、一四	八	第七期特修科	周筑	防波	薄山
五、一、二六	一〇	第二十九期高等科 第三十二期普通科	周筑	防波	薄山
六、三、二八	三	第八期特修科	周筑	防波	薄
六、三、一九	六	第三十三期普通科	右同	右同	右
五、三、二二	六	第二十七期高等科 第三十期普通科	橋立	薄山	館山沖
五、七、三	六	第二十八期高等科 第三十一期普通科	周防	右同	右
五、一、二四	六	第二十九期高等科 第三十二期普通科	右同	右同	右
五、三、一九〇	五、二、二一	第二十八期普通科	第二十八期普通科		
自五、三、三〇	五、三、二一	第二十四期普通科	第二十八期普通科		
自五、七、一四	五、七、六	第十五期高等科 第十九期商船學生	第二十九期普通科		
自五、一〇、二二	五、一〇、一四	第二十五期普通科	第三十期普通科		
未	六、二、二二		第三十一期普通科		
未	六、三、一〇	第二十六期普通科			

大正五年年度海軍砲術学校各期学生練習生消費兵器年額表

學生練習生	特別等	高等科學科	普通科學科	特別科學生	高等科學科	普通科學科	特別科學科	高機	研究
-------	-----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	----	----

種	特	陸		砲										艦									
		銃	拳	小銃	機砲	電氣火管	警殺火管	外砲	三吋砲	六吋砲	三吋砲	四吋砲	六吋砲	十二吋砲									
號火	信號火箭	尾索	尾杆	十五號爆索信管	安全道大線米	導火藥罐	陸式彈藥包	陸式彈藥包	海軍銃	空包	彈藥包	彈藥包	安式	電氣火管	警殺火管	外砲	三吋砲	六吋砲	三吋砲	四吋砲	六吋砲	十二吋砲	
短	長																						

考

一、括弧内ニ記入ナキ数字ハ學期(研究射撃用)ニ付定メタル兵器数字ナリ

二、高等科學科學生特修科學科學生全時入校スルニキ特修科學科學生付定メタル兵器之消費額ナルヲ得サレトス

三、研究射撃ノ欄中△付ク附シタル兵器消費額ヲ供出スル但シ使用砲ニテ弱裝藥ノ制ナキ場合ハ此限リニアラス

四、學生練習生ニテ各其教程ニ適應スル射撃ノ要領ヲ知ラシム

五、擔任教官教員ヲシテ教育ニ必要ナル技術ヲ修養セシム

六、教育方針其他實地解決ヲ要スル事項ヲ研究ス

備

(一) 試射

(二) 不良彈ヲ生シ之ヲ補填スルヲ要スル補填用

(三) 括弧内数字ハ學生練習生每名一名付キ定メタル兵器数字ニテ入ルヲシテ各其教程ニ適應スル射撃ノ要領ヲ會得セシムル目的ヲ以テ消費スルモノトス

(四) 内数字ハ普通科修業、特修科將校學生每名一名付定メタル兵器数字ナリ

(五) 教育上不得已障害ヲ受ケルモノハ外砲砲彈藥包縮射彈藥包空包ヲトシテ二課別各ヲ以テ交換使用スルコトヲ得

(六) 消耗殘リ兵器其ノ都度還納スルモノトス但シ所半砲以上ノ彈藥ハ再之ヲ領收スルコトヲ得

(七) 本表、外高等科練習生各學期(付六吋砲炸藥彈六發普通科練習生各學期(付三吋砲炸藥彈三發)ヲ領收シ信管裝備法練習後還納スルコトヲ得

(八) 本表、外射撃施行中毎日使用スル砲每一門ニ就キ一發ヲ超過スル如ク空放裝藥ヲ發射スルコトヲ得

(九) 研究射撃用十二吋砲彈藥ハ主シテ射法研究用トシ之ヲ使用スルニ當リテ後ノ方案ヲ具シテ教育本部長ノ承認ヲ受ケルヲ要ス

標準供給彈

高等科學科學生

六吋砲 常裝藥炸藥彈 二 榴彈射撃用
 減裝藥炸藥彈 四〇 夜間射撃用
 三吋砲 減裝藥炸藥彈 九六 夜間射撃用
 三吋砲 常裝藥炸藥彈 六〇 夜間射撃用

普通科學科學生

六吋砲 常裝藥炸藥彈 二 榴彈射撃用
 減裝藥炸藥彈 四〇 夜間射撃用
 三吋砲 減裝藥炸藥彈 九六 夜間射撃用
 三吋砲 常裝藥炸藥彈 六〇 夜間射撃用

戰時海上保險補償法ニ依ル保費契約高 大正五年十二月分

大正五年一月三十一日調

商工部 海運課

昨五年十二月分ニ於テ戰時海上保險補償法ニ依ル保費契約高一億四千八百二十五萬餘円ニシテ前月分ニ比シテ三百餘萬餘円即チ三分三厘増加セリ。貨物契約高(再保險ヲ除ク)一億二千九百八十七萬餘円ニシテ外國貿易高ニ億八百四萬餘円ニ對シテ其ノ大半一分五厘ニ當ル。又施行以來保險契約金額累計ハ二十四億二千一百餘萬餘円ニシテ内損害發生シルモノ八百七十七萬三千九百六十二円ニ對シテ政府補償額ハ六百九十三萬九千七百七十円ニシテ内補償既済モノ四百(七十三萬七千六百八十円)ニシテ

概要次ニシテ

内閣	船種	件数	新 契 約		内 再 保 險		
			件数	保費金額	保費料	件数	保費金額
船種	十二月分	9	6,895,000	27,882	0	1,475,000	14,195
	前月分	11,849	103,109,651	351,096	312	2,467,583	40,159
	累計	11,656	109,934,651	438,645	312	2,942,583	54,354
船種	十二月分	7	7,875,000	30,562	4	1,205,000	11,738
	前月分	10,223	101,484,469	272,452	421	2,162,661	21,461
	累計	10,240	113,359,469	286,824	428	10,467,661	32,609
船種	十二月分	498	253,251,000	2,262,224	116	23,286,924	200,691
	前月分	224,129	1,623,729,367	4,032,635	6,012	74,750,574	285,758
	累計	224,627	1,877,640,367	6,295,859	6,128	78,036,594	486,449
船種	十二月分	3	1,000,000	11,800	0	0	0
	前月分	4,973	37,269,422	139,390	78	2,037,737	12,405
	累計	4,976	38,269,422	151,190	78	2,037,737	12,405
船種	十二月分	5	1,400,000	7,400	2	0	0
	前月分	5,141	30,186,784	70,240	62	1,529,257	7,587
	累計	5,146	31,586,784	77,640	62	1,529,257	7,587
船種	十二月分	45	11,550,000	106,750	0	0	0
	前月分	101,861	511,022,032	1,123,645	797	35,964,004	61,845
	累計	101,906	522,572,032	1,229,795	797	35,964,004	61,845
船種	十二月分	70	7,875,000	39,350	3	1,475,000	14,195
	前月分	16,622	140,399,092	490,486	390	10,505,320	52,644
	累計	16,612	148,254,092	529,836	393	11,980,320	66,839
船種	十二月分	12	9,275,000	62,760	5	2,125,000	11,738
	前月分	15,474	135,671,221	324,032	495	7,892,221	29,258
	累計	15,486	144,946,221	386,792	500	11,797,221	41,196
船種	十二月分	543	2,604,010,000	2,368,774	116	23,286,000	200,691
	前月分	325,990	2,134,811,397	5,156,680	6,799	110,774,598	347,608
	累計	326,533	2,404,212,397	7,525,654	6,710	134,060,598	548,299

外國貿易高ニ對シテ戰時海上保險契約高比較

十二月分	外國貿易高	補償法ニ依ル貨物保險契約高(再保險ヲ除ク)	割 合
	208,041,305	1,298,073,760	0.16%

戦時海上保険補償法に依る保費契約の申渡高

自大正三年九月十二日至同六年一月三十一日

2141

	損害額	政府補償額	右	
			補償済額	補償未済額
トロイラス号 積荷	62,693	50,155	50,155	-
ウスターンスト号	27,147	21,717	21,717	-
カセ一号	124,863	99,890	99,890	-
テイルバズ号	4,931	3,945	3,863	82
ハスペリアン号	28,473	22,778	17,815	4,963
八咫丸 船体積荷	4,711,966	3,769,573	3,720,651	48,922
石ノ子丸 積荷	120,182	49,646	46,969	30,177
シロガシ号	24,845	27,896	27,412	464
サヤシ号	21,716	17,373	15,240	2,133
天明丸	574,000	459,200	447,200	12,000
クワローガン号	142,400	113,920	464	113,456
マゼラン号	2,091,146	1,672,917	-	1,672,917
クワントン号	229,600	183,680	-	183,680
合 計	8,673,962	6,939,170	4,870,396	2,068,794

備考、クワントン号(英國船)は本年一月下旬加奈太東海岸に於て敵艦に撃沈せられたリ

新刊



請願書



5. 6. 29
官房受領

軍務局接受

私設鐵道同志會ハ今回會員總會ニ於テ左ノ事項ヲ決議致シ

候間事情御調査ノ上願意貫徹致候様御詮議被成下度此段奉

請願候也 第二課長

第一課長



局員



御返



2142



第一、院線と私設線との接續點停車場に於ける共同使用料及借地料は高率と認むるに付き遞減方御詮議相成度



理由 院線と接續せる私線は悉く院線の營養線と認むべきものにして現行の接續停車場の共同使用料及借地料は高率に失せる嫌あれば特に遞減せられ私設鐵道の負擔を輕からしむる事

第二、輕便鐵道補助法施行規則第二條の三營業費算定公式五圓五拾錢を六圓五拾錢に改正せられ度

理由 現在營業しつゝある輕便鐵道の營業費は實際に於て一日一哩六圓五拾錢以上を要す而して一面に於て會社が収入増加の方法を講ずれば自然營業費の増加を來し補給額を減少せらるゝ結果なるを以て収入増加の途あるも着手せざる如き弊害あり之れ會社に取り不利益なるのみならず交通機關の效用を減殺する事少からず依て此制限を擴張せられ度事

第三、輕便鐵道株式會社及軌道株式會社も私設鐵道株式會社と同じく株金全額拂込前

と雖も主務大臣の認可を受け其資本を増加することを得せしむる事に法律を改正せられ度

理由 私設鐵道法第二十三條の規定に因る株金全額拂込前に於て線路の延長又は改良の費用に充る爲め其資本を増加する事は輕便鐵道 軌道に於ても何等私設鐵道に撰ぶ所なく會社經營上最も必要の事に付本法を準用されん事を望む

第四、輕便鐵道補助法第二條に毎年度二十五萬圓を累加し「百二十五萬圓に至りて止む」とあるを「二百五十萬圓に至りて止む」と改正相成度

理由 輕便鐵道補助法は大正三年八月法律第四十一號を以て改正せられ其補給期限五ヶ年を十ヶ年に延長せられたる一事は當業者の大に欣幸とする處なりしも之れに伴ふ補助金額の増加なき爲め改正前の舊法に比し補助の程度を縮少せられたる結果となり當業者は却て困難の状態にあり依て補助基金を増加して改正法の恩典に浴せんとする事

第五、輕便鐵道國庫補助金に對しては所得税を賦課せざる様所得税法を改正せられ度
理由 輕便鐵道が開業後或期間内收支の權衡を得ずして經營困難なる爲め國庫補助の恩典に浴せる次第なり然るに其補助金に對し所得税を徵收せらるゝは會社の甚痛苦とする處なるを以て免除を乞ふ事

第六、通行税を全廢せられ度而して全廢に至る迄の間は通行税に付徵收手数料を交附せられ度

理由 現行通行税は一般乗客の苦痛とする所にして殊に短距離乗客の多き私設鐵道、輕便鐵道及軌道に於ても長距離乗客と同一の定率を課せらるゝは不公平の嫌あるを以て全廢を望む所以なり然れども急に全廢の運びに至らざる事情ありせば其間通行税徴收に付他の國税徴收等の取扱と同様相當の手續料を交附せられ度事

第七、私設鐵道輕便鐵道軌道に對しては國税の外特別の地方税を賦課せざる様願度

理由 目下私設鐵道輕便鐵道及軌道業者に對する國税の負擔は多額に達し困難の事情あり、然るに各府縣に於ては國税以外更に軌道税、車輛税等の如き特別地方税を賦課せる處あり其結果會社は益々經營難に陥り甚しきに至りては近時軌道の昂騰を機とし賣却して會社を解散整理せんとするものあるに至り交通機關の發達を阻害する事尠からざるを以て斯る特別地方税は免除せられん事を乞ふ事

第八、營業税法第二十一條に鐵道營業を開始する者は開業の翌年より尙三ヶ年間營業税を徴收せずこの規定あり商法に所謂開業の意義は全線開業の場合と解釋し全線開業後三ヶ年間營業税を免除せられ度

理由 大審院判決例は商法第百九十六條の「開業に至る迄利息配當をなす事を得」の法文解釋を全線開業と決定せるを以て會社が利息配當中は未開業と見做さるべからず、故に會社が利息配當中は所謂建設中に屬し國庫補助を申請する資格なきもの故之等一部開業は營業税法の開業と見做さるるを至當とす依て全線開業後三ヶ年間は營業税を免除せられ度事

第九、相當鐵道會社株を日本銀行見返擔保品として採用せられ度

理由

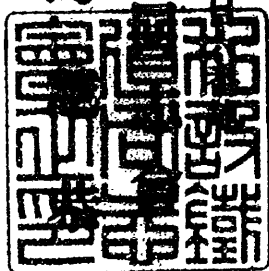
鐵道は國家公益の事業にして國庫より補助を與へ其發達を獎勵しつゝあり而して鐵道國有法實施前に於ては日本銀行見返擔保品として採用せられたる會社多數ありたり現に南海鐵道會社の如きは其當時より與へられたる資格今尙存在せり依て日本銀行に於て現在の私設鐵道、輕便鐵道、軌道會社中基礎確實なるものに對し見返擔保品たるの資格を與へられん事を、之れ斯業の發達普及を圖る上に於て最も捷徑たるべきを信ず

大正五年六月二十八日

東京市京橋區南傳馬町壹丁目

私設鐵道

會長 馬



平

右決議事項に基く請願の實行委員

伊 藤 英 一

伊 東 要 藏

西 榮 太 郎

堀 豐 彦

堀 内 良 平
竹 村 欽 次 郎
高 木 益 太 郎
根 津 嘉 一 郎
中 根 虎 四 郎
小 野 田 周 齋
久 須 美 東 馬
藤 井 善 助
青 木 正 太 郎
瀬 下 秀 夫

2146

軍務局

第二課
第一課

船越

神

神

神

軍務局
5月14日

青丘居士 清祥と賀

上之陳を社儀と被神

后に祀祈りて勅命を拜領す

賜ふる書方印を以て主任と志

同和業系に擔任す有給の

就るに格ありと引

立に願ふ度と懇請先

以披露す少無と申す

大正五年五月
敬

東京市麹町区八重洲町一

古河合名会社

神戸市紫雲町四丁目三十三番五号

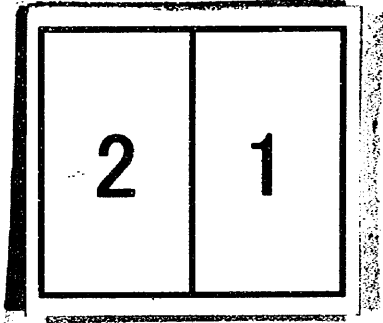
神戸船舶事務所

海軍省

軍務局長殿

2147

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 判 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

自大正四年四月
至大正五年三月

各種練習生入校期日豫定一覽

軍務局 參考

學校別	種別	員數	期日	
砲術學校	特修科	第五期	20 自 4-6-26 至 4-6-29	
		第六期	20 5-1-6 5-1-8	
	高等科	第二十六期	70 4-4-24 4-4-27	
		第二十七期	70 4-9-1 4-9-9	
		第二十八期	70 5-1-6 5-1-8	
	普通科	第二十九期	233 4-4-24 4-4-27	
		第三十期	234 4-9-1 4-9-4	
		第三十一期	233 5-1-6 5-1-8	
	水雷學校	水特修科	第四期	20 4-8-29 4-8-31
第五期			20 5-1-8 5-1-10	
水高等科		第十八期	25 4-5-8 4-5-10	
		第十九期	25 4-11-8 4-11-10	
水普通科		第二十二期	125 4-4-23 4-4-25	
		第二十三期	125 4-10-15 4-10-18	
電信術		高等科	第十一期	20 4-5-15 4-5-17
			第十二期	20 4-10-27 4-10-29
		普通科	第十一期	50 4-5-31 4-5-31
			第十二期	50 4-11-26 4-11-28
練習艦運用術		第十三期	40 4-5-23	
		第十四期	40 4-11-28	
機関學校	機関術高等科	第十八期	60 4-5-23	
		第十九期	60 4-11-25	
	機関術普通科	第十七期	200 4-5-23	
		第十八期	200 4-11-23	
	電機術高等科	第九期	20 4-5-23	
		第十期	20 4-11-23	
		第十八期	65 4-5-23	
	電機術普通科	第十九期	65 4-11-23	
		工術	第二十一期	70 4-5-23
	第二十二期		70 4-11-23	
船舶	第十一期	30 4-11-23		

軍務局接受
主三月十日

2148

月別々見出し

月	種別	月	種別
四月	第二十六期高砲	十月	第二十三期普水
	第二十九期普砲		第十二期高電信
	第二十二期普水	十一月	第十九期高水
第十八期高水	第十二期普電信		
第十一期高電信	第十四期運用		
第十三期運用	第十九期高機		
第十八期高機	第十八期普機		
第十七期普機	第十期高機		
第九期高雷機	第十九期普雷機		

水 雷 學 校	水	特修科	第三十一期	233	5-1-6	5-1-8	
			第四期	20	4-8-29	4-8-31	
		第五期	20	5-1-8	5-1-10		
	雷	高等科	魚雷科 電氣科	第十八期	25 15	4-5-8	4- 5 -10
				第十九期	25 15	4-11-8	4-11-10
	術	普通科		第二十二期	125	4-4-23	4-4-25*
				第二十三期	125	4-10-15	4-10-18
	電信術	高等科		第十一期	20	4-5-15	4- 5 -17
				第十二期	20	4-10-27	4- 10 -29
		普通科		第十一期	50	4- 5 - 31	4- 5 - 31
				第十二期	50	4-11-26	4-11-28
	練習艦 運用術			第十三期	40		4-5-23
				第十四期	40		4-11-28
	機 関 學 校	機関術	高等科	第十八期	60		4-5-23
第十九期				60		4-11-25	
普通科			第十七期	200		4-5-23	
			第十八期	200		4-11-23	
電機術		高等科		第九期	20		4-5-23
				第十期	20		4-11-23
		普通科		第十八期	65		4-5-23
				第十九期	65		4-11-23
工術			第二十一期	70		4-5-23	
			第二十二期	70		4-11-23	
	第十一期		30		4-11-23		

軍務局接受
土三月十日

2148

月別ヶ見出し

月	種 別	月	種 別
四月	第二十六期高砲	十月	第二十三期普水
	第二十九期普砲		第十二期高電信
五月	第二十二期普水	十一月	第十九期高水
	第十八期高水		第十二期普電信
六月	第十一期高電信	十二月	第十四期運用
	第十三期運用		第十九期高機
	第十八期高機		第十八期普機
	第十七期普機		第十期高電機
	第九期高電機		第十九期普電機
	第十八期普電機		第二十二期工術
	第二十一期工術		第十一期船匠術
八月	第五期特砲	一月	第六期特砲
	第十一期普電信		第二十八期高砲
九月	第四期特水	二月	第三十一期普砲
	第二十七期高砲		第五期特水
	第三十期普砲		

2149